新受洗者たちでコーヒーサービス

東京・清瀬教会「からし種の会」

主日のミサ後にコーヒーサービスをしている教会は多いが、東京都中北部・清瀬市の清瀬教会（伊藤淳神父）（東京教区）では毎月第2・第4主日のミサ後、受洗から5年目までの〝新人〟グループ「からし種の会」が信徒会館のホールで行っている。

提供するコーヒーはインスタントだが、メンバーの提案で、コーヒーが苦手な人のためにティーバッグの紅茶を用意したり、茶菓子を付けたり、サービスを工夫していて好評だ。

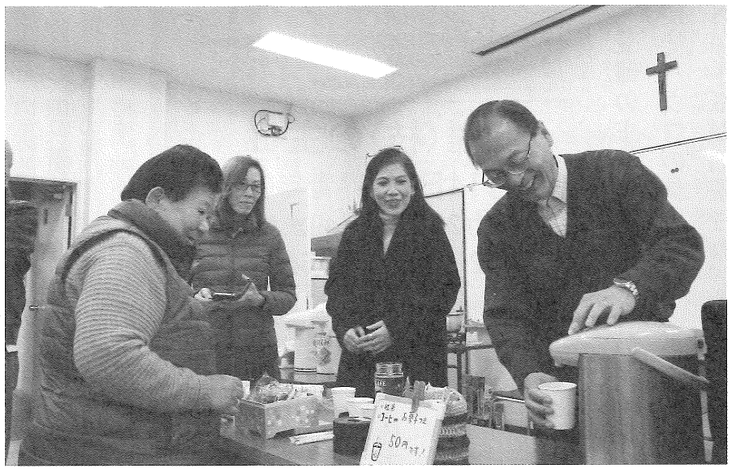
天川登美子さん(77)は、「(新受洗者は教会では)どうしても〝お客さん〟になってしまいがち。自分たちで奉仕しようとする姿を見て応援したくなります」と話す。

始まりは3年前、伊藤神父が教会に新受洗者の受け皿ができていないと感じたことがきっかけだった。

清瀬教会の受洗希望者は、1年間の入門講座に無欠席で参加する「厳しい」条件をクリアして受洗する。それからしばらくは熱心に教会に通うが、何年かたつと姿を見せなくなる人が少なからずいた。

そこで伊藤神父は、信者同士が親しくなるための手段として、手頃なコーヒーサービスが適切だと考え、これを新受洗者だけで担当してもらうことにしたのだ。

「新受洗者はどうしても受け身になりがちで、教会共同体の信者さんと親しくなるには相当の努力が必要なのだろうと思います。けれども、インスタントコーヒーなら誰でも入れられるし、新受洗者が接待する側に回れば多くの信者さんと必然的に会話することになるし、顔や名前も覚えてもらえるでしょう？」（伊藤神父）



飲み物を提供する「からし種の会」メンバー

「話すきっかけ」に

3月10日は、会のメンバーのうち、受洗3年目の山田俊明さん(67)と小出清隆さん(55)が担当。2人は、コーヒーをもらいにきた人に、「ミルクは使いますか？」「お菓子もどうぞ」などと声を掛けてサービスし、持ち場を離れる時は、近くにいる信徒に手順を教えて留守番を頼んでいた。

小出さんは、「以前はミサ後すぐに帰っていましたが、（この活動で）教会の人と話すきっかけができました」と喜ぶ。

山田さんも笑顔でこう話した。

「皆さん喜んでくださるし、やっていて楽しいですよ！（会のために）いつもお湯を沸かしてくださる人や、菓子を提供してくださる人もいて、（共同体に）支えられているのも分かります。今日のミサに〝（メンバー）候補〟の洗礼志願者が来ていましたから、この活動をどんどん引き継いでいかなくてはと思います」

鹿児島教区・旧司教館で「こども食堂」

親子が集い、ほっとする場に

鹿児島市の唐湊（とそ）にある旧司教館では、毎月第4土曜日の正午から、子どもたちが一緒に食事をしたり遊んだりできる「こども食堂」が開かれている。2017年の4月末に始まり、間もなく2年になる。

きっかけは、山口好信神父（64／鹿児島教区）が、鹿児島県が全国で相対的貧困率が高いことを知り、教会として何かできないかと思ったことだ。広さのある旧司教館を食堂会場として利用できないか、郡山健次郎名誉司教に相談したところ快諾が得られ、何人かの信徒たちも賛同してくれたので開設することになった。

参加費は高校生までは無料で、大人は200円。小学5年生ぐらいまでの児童が多いが、親子でも参加でき、その中には1歳児もいる。現在、約30人が利用している。

スタッフは前日に会場の掃除や設営、食材の購入や野菜の切り分けなどを済ませておき、当日、栄養のバランスと子どもの好みを考えて調理。バイキング形式で提供する。食材や、経費の多くは寄付で賄う。

ポスター等で呼び掛けてボランティアを募集したところ、鹿児島大学や鹿児島純心女子短期大学の学生も来てくれた。配膳や食器の片付けだけでなく、子どもたちに童話の読み聞かせ、紙芝居、ギター演奏、外遊びなどをして楽しませてくれるようになった。

子どもたちは思い思いに絵本を読んだり、卓球やゲーム等をしたりして過ごし、2時に終了。母親同士も食事を共にしながら歓談し、悩み事を聞き合ったりする。和やかな雰囲気の中、心がほっとできる時と場所になってきている。

バイキング形式で提供

子どもたちが帰るとスタッフは反省会を行う。その中で次のような声が挙がる。「ここを利用することでほっとできる場所や時間が提供できることに意義があるように思う。来てくださるお客さんをこちらで選ばないことが大切だろう。どういう必要があって来ておられるか、私たちは知らないのだから」

「やっと軌道に乗ってきたように思う。ボランティアの方たちも共に成長してきていて、スタッフ、ボランティア、利用者の間でお互いの絆が生まれつつある」

「来られているお母さんたちも協力的で、おさがりの幼児服を持ってきてくださっている。これからもずっと続けていきたい」

模索しながらの活動が続けられている。

映画『幸福なラザロ』

ヨハネ福音書に登場する「ラザロ」をモチーフにしたイタリア映画『幸福なラザロ』は、愚直なまでに「人を大切にする生き方」しか知らない〝小さな聖人〟が、現代社会に現れたらどうなるのかを描く。

親の顔も知らず、祖母に育てられたラザロは、イタリアのある村で小作人として働いている。たばこ農園で働く小作人たちは、領主に搾取され、奴隷状態で働かされているが、誰もが嫌がる仕事は、ラザロに押し付けていた。

しかし、ラザロは疑うことを知らず、人々の悪意やうそにも気付かず、すべてを言葉通りに信じて、何でも引き受ける。過酷な農作業をこなし、重い荷物を運び、空腹な人には自分の食べ物を差し出す。彼は怒らず、何も欲しがらない。それが本能であるかのように、ただ「人を大切にする」だけだった。

ある日、大事件が起きて、ラザロは崖から転落する。キリストが愛した福音書の「ラザロ」が死後、復活したように、映画のラザロもよみがえるのだったが―。

もし現代社会で、〝小さな聖人〟ラザロに出会ったら、彼の善良さや聖性に気付く者はいるのだろうか。逆に、小ばかにし、無視して、さげすむかもしれない。

アリーチェ・ロルヴァケル監督は、あるインタビューでこう話していた。

「聖人をイメージする時、私たちは強さとカリスマ性を兼ね備え、強い主張を持った存在を思い描くでしょう。しかし、私が考える聖人は、豪華な法衣を着た司祭が壇上に上がって朗読するような、制度化された信仰では定義されません。私が今、作品を通して伝えたい『聖なること』とは、人間の尊さを信じるということです」

©2018 tempesta srl・Amka Films Productions・Ad Vitam Production・KNM・Pola Pandora RSI・Radiotel evisione svizzera・Arte France Cinema・ZDF/ARTED.

作品は、「月」「オオカミ」「音楽」「風」など、〝聖書の世界〟を連想させる象徴的な〝記号〟にあふれている。まさに読み手の数だけ味わい方が広がっていく寓話とも言えるだろう。

詳細は、☎〇三(6459)二六七一（キノフィルムズ）まで。

▼人事▲

（　）内は前任地など

《さいたま教区二次》

【栃木県】（4月1日付）

【県北ブロック】

大田原・烏山・那須主任（古河・川越主任を継続）　鈴木國弘

［霊的生活の振り返り並びに療養］

アルスの家（大田原主任・栃木県北ブロック協力）　坂上彰

【埼玉県】（4月22日付）

【埼玉県東ブロック】

大宮主任（深谷管理者、群馬西ブロック協力）　谷国定

［埼玉北ブロック］

本庄主任（大宮主任、本庄管理者）　中嶋義晃▼深谷主任（一次発表の異動に追加）　クマル・プラビン＝カプチン・フランシスコ修道会▼深谷司牧協力　斎藤優＝終身助祭

【茨城県】

【茨城ブロック】

［水戸司牧協力］　ホルヘ・マヌエル・マシアス・ラミレス＝助祭

◆取り消し（3月1日付）

【言語圏司牧担当】

［ヴェトナム語圏司牧協力］

ダム・ロー・シアン＝メリノール宣教会

《長崎教区》

［引退］

村中司

［留学］（4月6日出発）

フィレンツェ／ローマ（福江小教区助任）　山内啓輔

（5月5日付）

黒崎小教区主任（中町小教区主任・南地区長）　橋本勲▼青砂ヶ浦小教区主任（浦頭小教区主任）　小瀬良明▼相浦小教区主任・佐世保地区長（真手の浦小教区主任）　山内実▼佐々小教区主任（青砂ヶ浦小教区主任）　岩﨑康彦▼植松小教区主任（山田小教区主任）　福島光明▼丸尾小教区主任兼務（青方小教区主任・上五島地区長）　眞浦健吾▼教区本部事務局長〈部長、委員長は兼務〉（生涯養成部長、家庭委員会委員長）　中濱敬司▼浅子小教区主任（植松小教区主任）　紙﨑新一▼長与小教区主任（天神小教区主任）　平本義和▼中町小教区主任・南地区長（黒崎小教区主任）　葛嶋秀信▼木鉢小教区主任（丸尾小教区主任）　山本一郎▼福岡カトリック神学院養成者（佐々小教区主任）　嘉松宏樹▼天神小教区主任（日本カトリック神学院東京キャンパス）　中島誠志▼早岐小教区主任（水俣小教区主任＝福岡教区）　一ノ瀬輝幸▼浦頭小教区主任（木鉢小教区主任）　工藤秀晃